

大岡昇平全集

第二卷

大岡昇平全集 第二卷

定価 三五〇〇円

昭和四十八年十一月三十日 初版
昭和五十一年四月五日 再版

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一一

電話(五六一)五九二一

T104 振替東京二二三四

検印廃止

©一九七三

大岡昇平全集 第二卷 目次

小説 二

武蔵野夫人

野 火

出 征

海上にて

比島に着いた補充兵

サンホセの聖母

ミンドロ島誌

暗号手

俘虜逃亡

襲 撃

301 293 281 277 266 255 245 226 128 3

食慾について

歩哨の眼について

敗走紀行

西矢隊奮戦

山中露營

靴の話

女中の子

わが復員

妻

帰郷

愉快的な連中

再会

神経さん

解題

池田純溢

451

440

小說 二

武蔵野夫人

ドルジェル伯爵夫人のような心の動きは時代おくれであらうか

ラディゲ

第一章 「はけ」の人々

土地の人は何故そこが「はけ」と呼ばれるかを知らない。「はけ」の荻野長作といえ、この辺の農家に多い荻野姓の中でも、一段古い家柄とされているが、人々は単にその長作の家のある高みが「はけ」なのだと思っている。

中央線国分寺駅と小金井駅の間、線路から平坦な畠中の道を二丁南へ行くと、道は突然下りとなる。「野川」と呼ばれる一つの小川の流域がそこに開けているが、流れの細い割に斜面の高いのは、これがかつて地質時代に関東山地から流出して、北は入間川、荒川、東は東京湾、南は現在の多摩川で限られた広い武蔵野台地を沈澱させた古代多摩川が、次第に南に移って行った跡で、斜面はその途中作った最も古い段丘の一つだからである。

狭い水田を発達させた野川の対岸はまたゆるやかに高まって楯状の台地となり、松や桑や工場を乗せて府中まで来ると、第二の段丘となって現在の多摩川の流域に下りている。

野川はつまり古代多摩川が武蔵野におき忘れた数多い延長川、所謂「名残川」の一つである。段丘は三鷹、深大寺、調布を経て喜多見の上で多摩の流域に出、それから下は直接神奈川の多摩丘陵と対しつゝ蜿蜒々六郷に到っている。

樹の多いこの斜面でも一際高く聳える樺や樫の大木は古代武蔵原生林の残物であるが、「はけ」の長作の家もそういう樺の一本を持っていて、遠くからでもすぐわかる。斜面の裾を縫う道からその樺の横を石段で上る小さな高みが、一帯より少し出張しているところから、「はけ」とは「鼻」の訛だとか、「^{はし}端」の意味だとかいう人もあるが、どうやら「はけ」は即ち、「^{はけ}峽」にほかならず、長作の家よりはむしろ、その西から道に流れ出る水を溯って斜面深く喰い込んだ、一つの

窪地を指すものらしい。

水は窪地の奥が次第に高まり、低い崖となつて尽きるところから湧いている。武蔵野の表面を蔽う壩^{いづみ}、つまり赤土の層に接した砂礫層が露出し、きれいな地下水が這い出るように湧き、すぐせせらぎを立てる流れとなつて落ちて行く。長作の家では流れが下の道を横切るところに小さな溜りを作り、畠の物を洗つたりなぞする。

古代武蔵野が鬱蒼たる原生林に蔽われていた頃、また降つては広漠たる荒野と化して、渴いた旅人が斃死した頃も、斜面一帯はこの豊かな湧き水のために、常に人に住われていた。長作の先祖が初めここに住みついたのも、明らかにこの水のためであつて、「はけの荻野」と呼ばれたのもそのためであろうが、今は鑿井技術が発達して到る処井戸があり、湧水の必要は薄れたから、現在長作の家が建っている日当りのいい高みが「はけ」だと人は思っているわけである。

もっとも人がこの湧水を忘れたのは、あながち生活の原因からばかりではない。長作の家で使っている水溜から西へ十間ばかり、つまりこの窪地の正面を蔽う広さの全部が、今は生垣によつて占められ、洒落れた屋根門の中には梅、木犀、泰山木等の花樹が、四季とりどりの花を咲かせる。つまりこれは近頃とみにこの辺に増えた都会人の住宅の一つであつて、道行く人はこの垣の中に、かつてこの土地の繁栄の条件であ

つた湧水があらうなどとは思わない。

三十年前湧水を含む窪地一帯の約千坪の地所は、殆んどただのような値段で東京の官吏宮地信三郎の手に移つた。道傍の水溜における水の使用と、現在の「はけ」の地所に新しい井戸を掘る費用の負担とは、長作の先代が譲渡に際してきわどくつけた条件であつたが、それでも先代は死ぬまで損をした損をしたとこぼしていた。というのは土地を手離して五年経つと、ここから徒歩十五分のところに小金井駅が出来、地価が三倍になつたからである。

鐵道省事務官の宮地は無論駅の新設を予め知っていた。しかし、彼がここを選んだのはあながち打算のためばかりではない。彼は実際「はけ」が気に入つたのである。水があり日溜りになっているところも気に入つたが、何よりも気に入つたのは富士が見えることであつた。

富士は見晴らす多摩の流域と相模野の向うに、岬のように突き出した丹沢山塊の上に小さく載っていた。その四季と天候による変貌は、彼のいつも見倦きぬ眺めであつた。樹木を愛した彼はもともと樹の多いこの地面に、さらに様々の珍しい觀賞用の樹木を植えたが、泉と同じ高さに崖を切り開いて建てた家の傍では、樹を殊更に軒に近づけ、葉によつて富士の眺めが遮られないようにした。

宮地信三郎がこれほど富士を愛したのは、彼がこの山を見

て幼時を過したからである。もと旗本であった彼の家が瓦解後静岡に移って間もなく彼は生れた。没落した侯家の士族というハンディキャップの下に彼が東京へ出て明治政府に職を得たのは、幾多の苦難を経た後であった。彼の五人の兄弟（彼はその名の示す通りその三男であった）は明治初期の混乱の裡に殆んど四散し、大正時代なお往来しているのは軍人として参謀大佐まで昇った末弟の東吾だけであったが、その弟も日本降伏の翌日拳銃自殺を遂げてしまつて、かつて五百石取りの旗本の家であつた宮地家も、今は彼一人になつてしまつた。

彼は自殺した弟を馬鹿だ、といつていた。彼によれば今度の敗戦は明治の足輕政府の猪突主義の当然の帰結であり、それに殉ずるなぞもつてのほかなのであつた。彼は勝海舟の愛読者であり、好んで徳川末期、中央の才人によつて起草された大名会議案の進歩性を誇張して、訪問客を煙に巻いた。日本はやつと神君以来の合理主義に歸るのだ、と彼はいつていた。

在官当時から彼は一種の偏屈者として通つていたが、自分の仕える政府を侮つていただけに、利殖の道はうまかつた。大正の末停年で官を退くまでに、既に相当の産を作つていたが、退職後も縁故を辿つて静岡県の或る私鉄の重役に収まり、二年の間にさらに産を殖やすと、予め別荘として建ててあつ

た「はけ」の家に引込んでしまつた。

こうして彼の生涯は或る程度の幸福に達していた。ただ子供運はよくなかった。同じ静岡県の士族から貰つた妻の民子との間に、二男一女が生れたが、男はいずれも早逝し、末娘の道子だけしか残らなかつた。それも次男の死ぬ前に片附き子供がなかつたので、結局宮地家には跡取りが絶えることになつたが、一種の冒險的立身の生涯を送つて来た彼は、それをあまり苦に病まなかつた。

「はけ」の家を建てるために崖を崩した時、横穴が現れ人骨があつた。民子はそれを不吉とし、工事を中止して他に土地を探すことを主張したが、彼はきかなかつた。「墓は古代人のもので、ここが人の住むに適する」という証拠だ」と彼はいつた。しかし妻はやはり男二人が夭折したのは偏見に墓の祟りだ、いずれ宮地家は死に絶えたと固く信じながら彼女自身も昭和二十年空襲の最中に死んで行つた。

その頃は娘の道子夫婦もこの家に同居していた。夫の秋山忠雄は東京の或る私立大学のフランス語の教師で、道子を愛して求婚したのであつたが、彼女を貰つた頃宮地の家が羽振りがよく、彼が何となく養子のように人に見られたことを、快よからず思つていた。で、空襲が始まると幾度か義父と一緒に暮すようにすすめられながら、何とかかんとかいつて渋つていたが、五月渋谷の家が焼けるに及んで、やつと「は

け」の家へ来ることに同意した。

道子は父に鍾愛されていた。男の兄弟と一緒に育って、幼時はむしろ強情ではねっかえりの方であったが、物心つく頃から急におとなしくなった。少しお凸で顎が張り、折角の瓜実顔はなんとなく空豆に似ていたので、家でいつも「そらまめさん」と呼ばれていたが、当人はむしろそれが得意であった。遠い四国の高等学校に入った長兄に出す手紙には、いつも署名のかわりに空豆の絵を描いた。

しかし丁度彼女がおとなしくなった十四五の頃から、だんだん形のいい鼻がせり出して来て、どうして「そらまめさん」どころではなく、母親譲りの白い皮膚と相俟って、なかなかの美貌を表わすようになった。女学校の上級生や近所の中学生からよく手紙が来たが、彼女はいつも開封しないで、母親に渡してしまうので、母親はいちいち学校へ抗議に行かねばならぬのを却って面倒がった。

「あなたに隙があるからですよ」と母親は叱ったが、道子はただびっくりしたような顔をして叱り手を見詰めるばかりなので、母親は却って安心した。

彼女はそのかわり早くから八歳年上の長兄の俊一に熱中した。俊一は何故か父親の哲学的シニスムに反抗し、若くからフランスの近代文学、殊にランボオに心酔して坊ちゃん風の漂浪の生活を送った。彼は丈が高く、小さな卵形の顔が長い

首の上にちょこんと載って美しかった。彼の言葉は彼女にとって金科玉条で、自分の生活の細目に到るまで何でも彼の指図を仰ぎ、盆暮に方々から貰う小遣もみんな彼に送ってしまった。

その兄が乱暴な生活のため肺を病んで二十四歳で死ぬと、今度は次兄の慶次が熱中の対象になった。彼は作曲家希望で少年の時からピアノを弾いた。彼女も一緒に習わされたが、彼女がさっぱり進歩しないのに反して、慶次が易々とむずかしいオーケストレーションを鍵盤の上で組み立てて行くのを、彼女は殆んど渴仰の眼で眺めた。その兄もやがて長兄と同じ二十四歳の若さで、恐らく長兄から感染した肺結核で死んで行った。彼女だけ感染の徴候を示さないのはちょっと不思議であったが、父に「それはお前の顎のせいだよ」といわれると、たしかにそうだと思われて来た。死んだ長兄に「道子の顔の造作はみんな優しいが、顎だけちょっと野蠻だな」といわれたことがあったからである。

女子大に在学中を秋山に望まれて十八歳で結婚すると、彼女は無論夫を溺愛した。しかし三年たって次兄が死んだ時、何だか自分が熱中する人はみな死ぬような気がして、夫をあまり愛してはいけないのではないか、とふと思った。彼女がこう思ったのと、夫が愛撫の際彼女の耳を噛む癖が妙に気になり出したのが、同時であったのはちょっと興味がある。

彼女はますます美しくなったが、その容姿の難をいえば少し胴が長すぎることであった。母親は彼女になるべく洋装をさせなかったが、着物を着せても「どうも帯の結びようがな いね」とこぼした。しかし父親は「なに構うものか、元禄時代は胴の長いのが美人の条件とされていたものだ」といつて笑っていた。

秋山の耳を囁む癖を道子が気にし出した頃、父親はまたこの感想を道子と差し向いで繰り返したことがある。その時彼は娘ももう一人前の女だから構わないだろうと思い、胴の長い女の闊朗的魅力について、ちょっと露骨な冗談を附け加えたが、じつと彼を見詰める娘の大きな眼が、みるみる涙で一杯になって行くのを見て、彼はびっくりしてしまった。

よくもののわかった人ではあったが、明治の書生として吉原の小店で常連であった宮地老人はこういうことを極く簡単に考えていた。妻を女主人として尊敬することは知っていたが、出張先などで到る処不実を犯し、それを別に悪いことも思っていないかった。だから娘の涙にただ女の虚栄心を見たにすぎず、その後に隠された、女心の微妙な傷を推察するところが出来なかった。

事實は道子は少し前から所謂女の務めが苦痛になっていたのである。夫の秋山は別に好色漢ではなかったが、妻の体に馴れるに従って、妻の感傷的な愛情に肉体的動作でしか応え

なくなつた。無心に結ばれた夫婦の肉体的接触の習慣の間に、男の習性によつて自然に生じる偏差であるが、女は通常なかなか男と調子を合わせることが出来ないものである。そこで危機は多く男の側の浮気という形で現われる。

秋山が道子と結婚したのは彼の三十の時でむしろ晩婚であつたが、それまで彼は女を知らなかった。埼玉県の貧農の家に生れた彼は、少年の時から出世のことより頭になかった。生来おとなしく意気地なしの彼は、学問による道を選ぶほかはなかったが、文学を志したのは、例えば数学のような確実な学問で衆に抜きこめるには頭が悪かつたからである。フランス文学が流行の端緒についた頃であつた。彼が専門としたのがスタンダールであつたのは、幾分ジュリアン・ソレルの出世主義に共鳴したところがあつたからでもあるが、主な動機は当時他の作家は大抵先輩達によつて分割し尽されていて、少し時代の古いこの作家より残されていなかったからである。しかし彼の時々専門雑誌などへ発表する論文は、要するに排他的熱狂と偏見に満ちたもので、到底彼の一枚看板を流行に押し出す力はなかった。

彼は憂鬱にフランス語教師の職に満足しなければならなかつたが、そのスタンダール耽読から、彼はこの十九世紀サロンの遊弋者の恋愛修行や姦通の趣味について甚だ熱っぽい影響を受けた。彼の教師としての経歴も、道子との平穩な結婚

生活も、この西欧の大エゴチストの冒険と何の関係もなかったにも拘らず、「恋愛論」や日記等に現われた、シニクな恋愛術に彼は憧れた。

前に書いた道子との危機に、こういう彼の奇妙な憧憬が何等かの役割を果していなかったとはいえない。その時彼が娼婦のところへ行かなかったのは臆病からであった。彼は花柳病が怖かったのである。もともと彼が三十まで童貞であったのも主としてこの理由によった。

死んだ次兄は秋山を嫌っていた。両親もこの結婚にあまり乗気ではなかったが、ただ道子が彼女の前に現われた最初の候補者に夢中になってしまったのである。秋山は色が黒く痩せて、ひどい近眼であったにも拘らず、道子には何故か愛すべき男と映った。彼女のような熱中する癖のある心には、いつも対象が必要であった。

危機は夫の臆病と妻の側の忍耐によってひとまず回避された。それから戦争のはげしさが二人を新しく結び合わせた。

秋山は貧弱な体躯のため兵役は免かれたが、学生の不断の勤労奉仕の監督として夏休みも駆り出され、連日の職員会議にぐったり疲れて帰って来た。道子も防火訓練やバケツリレーに体力を使い果して、心は留守であった。戦争とそれに続いた生活の逼迫は或る夫婦を別れさせたが、或る夫婦は却って固く結びつけている。

こういう二人の間にまたひびを入れたのが、宮地老人と同じ居たことであつたのは否めない。老人はもう七十五であつた。空襲警報が鳴っても彼は決して退避しなかった。「兎に角私はここにおりますから」といって、机の前を動かさなかつた。秋山は止むを得ず「ではお先に」といって道子と共に押入へ入るのだが、道子が父と一緒に室にいたがるのをよく押入の暗がりの中で叱った。

日本が降伏し進駐軍が附近の飛行場に降りるという噂が飛んだ時、当時の軍の一部が希望者に配布した青酸加里が、一家の話題となつたことがある。秋山は流石に外国文学をやつただけに、米兵の礼節を信じていたから、軍の迷妄を一笑に附したが、道子は「でも持っていた方が安心ね」といった。昔気質の宮地老人は娘を支持した。秋山は焦立って「貰うんなら貰つてもいいが、お前が飲んで俺はごめんだぜ」といった。結局教師仲間から手に入れた催眠剤を妻に与えることで折合ったが、「俺はごめんだぜ」の一句は道子を傷けた。

終戦開戦から食糧で秋山の郷里の農家が役に立ち、彼は初めて宮地の家に何かをしてやれる喜びを持ったが、さらに戦後不意に来た出版景気と奇妙なスタンダードの流行から、彼が昔やっておいた翻譯が方々から重版され、急に印税が入るようになった。宮地老人の恩給は彼自身のためにひと月分の

聞米を買いにも足らず、その所有する株券も反古どころか逆に出費さえかけるようになったのに引きかえ、秋山の取る新円の一家の経済における比例は増加した。彼は傲慢になった。彼は道子ますます自分と固く結ばれていると自惚れたが、何ぞ知らん、生活が楽になると共に、戦争中辛くも二人を繋いでいた唯一の心の紐帯は失われていたのである。

しかし夫婦は不思議なものである。道子は今では夫に愛情こそ持っていないかったが、結婚当初宮地の家の人々が夫に示したうとうとしい態度に対する反撥と名のつくものから得た庇護の習慣だけは残っていた。そしてそれは秋山が事実上一家の支柱となった今になっても変らなかつた。それが今では秋山を焦立たせた。

宮地老人は、なかなかへこたれなかつた。彼は物を売った。入れておくものの少なくなつた物置を売り、愛する樹木を売った。そして自分の生活を賄うだけのものは毎月欠かさず道子に渡した。さらに裏山の松を次々と倒して毎日風呂をわかつた。松の大木の一つで、彼は予め自分の寝棺を作らせたが、三分という厚さでは重くてしようがない、と秋山は変な取り越し苦労をした。

宮地老人の物置や樹の買主は赤の他人ではなかつた。即ち一年前から「はけ」の長作の家の向う栗林を隔てた地続きに移つて来ていた、甥の大野英治に売つたのである。

大野は老人の亡妻民子の妹の子で、やはり静岡へ移住した徳川の臣の出である。但し宮地兄弟が主に官吏や軍人の道を選んだのに反し、大野の家は士族の商法が一時意外に當つたものである。英治の父は横浜で生糸に手をつけ、相当派手にやっていたが、大正末期の財界の変動で一挙に産を失つて郷里に逼塞した。当時九歳の英治を頭に三人の子があり、英治は暫く宮地の家から東京の中学へ通つていたことがあつたが、やがてもと父の店の者で、奇妙な偶然から大正八年の暴落以来、とんとん調子で株で儲けた男の世話で、慶応の経済学部を出ると、やはりその男が買収した化学工場の社員となつた。工場は戦争中軍の下請工場として発展した。そして英治のお坊ちゃん風の猪突主義は戦時下の散漫な営業政策と調子が合ひ、満洲や華北に子会社を二つ三つ作つて廻つた後で、府中附近のかなり重要な工場を任せられるまでになつた。終戦と共に魚油仲介業者と組んで、彼はそれを素速く石鹼工場に切り替えた。

「はけ」の古風な地味な暮しに比べて、大野の家では万事が派手であつた。例えばその庭にしても、宮地の家のようにやたらに樹を植えず、斜面を切つて道まで張り出した地壇にはただ一面に芝が敷いてあるばかりであつた。もと茅場町の証券屋の別宅であつたが、持主がこんな田舎でも空襲を怖れて、青梅の方へ引込むところを安く手に入れたのである。

英治は少年時代を暫く道子と一緒にすごしていた。しかし二人の間には所謂幼馴染の愛情の芽生えさせる余地はなかった。明るく屈託のない英治の性分には道子は少し陰気であった。だから彼が道子と凡そ対蹠的な型の富子のような女を貰ったのも、なんの不思議はない。

富子は或る古い大会社の高級社員の娘である。生れは東京であるが、父の転任に従って各地を転々として、その土地土地の風を幾分ずつ身につけていた。例えば彼女の明るいコケットリイは大阪風であり、家計における慎重は名古屋風という風に。しかしこの女学校でも彼女は必ず浮名を流した。

大野が富子を識ったのは、彼女が最後に東京の或るあまり良俗をもっては鳴らない女学校の専修科を卒業して、同窓の悪友達と男を交えて開いた一種のワイルド・パーティの席上であった。当時若手の社員で陽気なことの好きな大野は友達に誘われて出席、大いに踊って富子を別室へ連れ込んだ。その時は平手打を喰っただけであったが、後彼一流の猪突主義で八方を説き廻り、到頭親と当人に結婚を承諾させてしまった。

やれやれと思っていたところ、不意に富子はどうしても大野と一緒にするのは嫌だといひ出し、大阪に縁づいている姉のところへ逃げて行ってしまった。大野が仕事をとおぼり出し、すぐさま追ひ掛けて行ったことはいうまでもない。彼は

無論富子に会わせて貰えなかったが、一週間ほどして東京へ帰った富子は意外にも結婚を承諾した。

この間の事情はよくわからない。富子の父は大阪で大野が何かトリックを用いて娘を誘ひ出し、体の関係をつけたと信じているが、姉は富子がそこで女学校時代の恋人で今は結婚している別の男と会ったのを知っている。

結婚は大野の保護者である元店員の負担で盛大に行われた。久し振りで静岡の田舎から上京した老母（父は死んでいた）は席上涙を流していた。しかし大野は母を新家庭へは引き取らなかった。

大野は妻を及ぶ限りの豪奢で飾った。会社の同僚や後輩を順々に家に招き、富子を見せびらかすのが彼の楽しみであった。彼の得意をさらに増すために、殊更に彼女に或る程度の自由を許した。例えば給仕上りの若い社員に接吻させて、彼が真赧になるのを見て喜ぶというような趣味である。

大野が丈の高い運動家型の体つきであったのに反し、富子は小柄であった。顔もそれに準じて小さく、目鼻が小ぢんまりとまとまっていた。ただ睫毛の長い眼はやたらに大きく、長く引いた弓形の眉で囲まれていた。唇は薄く大変接吻がうまいというのも大野の自慢の一つである。

彼女は夫の悪趣味にむしろ喜んで従っている風であったが、彼の前では正確に彼の許す範囲の媚態をはみ出さなかった。